実験小説ヤマト完結編【第 6 稿】

遠野 秋彦

御意見御提案は歓迎します

E-Mail: kirarin@autumn.org

Twitter: @autumn009

Blog: http://mag.autumn.org/default.modf?s=yamato

プロローグ

「あれがアクエリアスだ」とルガールは指さした。

ルガール大神官の私的な宇宙船は、ディンギル星に接近しつつある回遊惑星アクエリアスの近くを航行していた。

アクエリアスはほとんどが水の塊だが、中心部の核融合で内部が光って見えた。

2 人の息子が食い入るようにそれを見ていた。

ルガールの隣には妻がいた。

「おまえの考えは変わらないのか?」ルガールは質問した。

「はい。変わりません。アクエリアスの試練は受け入れねばなりません」

「我々にはアクエリアスをワープさせる技術がある」

「しかし、それを使うのは人生の試練に対して不誠実です。私は不誠実な選択をしてまで生きていたくはありません」

「私は、愛する家族をみすみす洪水の餌食にすることこそが、間違いだと思う」

「死ぬと決まったわけではありません」

「しかし……」

「死んでも、それがアクエリアスの定めです」

「では、あくまでウルクでの同行は拒否するというのかね?」

「はい。あくまであれはルガの神殿であって、私はルガの信者ではあり

ません」
「息子達はどうするのだ」
「ザールだけ連れて行って下さい」
「なぜだ」
「果たすべき役割がありますから」
「果たすべき役割か……。我々は全てアクエリアスから与えられた役割があり、そのためには命をも差し出すわけだな」
「でも、あなたは役割を拒否した」
「悪の道に染まったと言いたいのだろう」
「いいえ」
「違うと言うのか?」
「それもまた１つの役割なのですよ、あなた」
「やはりおまえを置いて行きたくはない」
「いいえ。それは私の役割ではありません。あなたはあなたの神が示す道をお行きなさい。その先に何があるとしても。私たちはアクエリアスに助けられた民族の末裔なのです」
ルガールは妻を抱きしめた。

第１章　ルガール・ド・ザール

ディンギルの爆破作業は順調に進んでいた。
しかし、ザールは苛立っていた。
この作業はけして誰にも見られてはならなかったからだ。このような爆破作業が行われたことは、誰の耳にも入ってはならなかった。
特に、ザールの父親であるルガール大神官大総統には知られてはならなかった。
情報はどこから漏れるか分からない。
だから、ボラーだろうとガルマンだろうと他のどの星の宇宙船だろうと、

見られてはならないのだ。
　それゆえに、所属不明の宇宙戦艦発見の報告に、ザールは狼狽した。
　この場合、所属の詳細はどうでも良いことであった。
　ディンギルの敵であっても味方であっても、それに意味は無い。
　敵だろうと味方だろうと情報漏洩につながりかねない。
　ザールは少し考えてから自信たっぷりであることを演技しつつ命じた。
　「我らの前に立ちふさがるものは全て敵だ。ハイパー放射ミサイルを持って撃滅せよ」
　そして満足した。強い者が生きる、弱者必衰。力こそ正義というのは、ルガール大神官大総統の日頃からの口癖であり、そから逸脱はしていない。うん、まあこれで事情を知らない部下も納得するだろう。
　しかし、反論は意外なところから来た。
　「いきなり我々の切り札を使うのでありますか?」と副官ナムルが驚いて振り返った。
　「そうだ」とザールはうなずいた。
　「正体も分からない相手にいきなり切り札を見せるとは」
　「ハイパー放射ミサイルは理論的に迎撃不可能なミサイルだ。このまま押し切って撃沈してしまえば見せたことにはなるまい」
　「もし、神の御使いならば、回避してしまう可能性があります。それに小ワープ回避をされたら……」
　小ワープ回避とは、ハイパー放射ミサイルないしそれに近い水準の武器に狙われた場合の防御方法としてザールと部下が練り上げたものだった。アイデアは難しくない。艦隊を小ワープさせて回避するだけだ。もちろん、そのためのエネルギーは温存しておく必要があるが、ミサイル主体の水雷戦隊はビーム砲撃を行わないのでエネルギー節約は容易だった。
　それよりも問題は、せっかくザールは「理論的に迎撃不可能」と言ってミサイル発射を自然に見せる流れを作ったのに、ナムルにそれを断ち切ら

れたことだ。迎撃は不可能だが回避はできる。つまり取り逃す可能性がある。ザールは目を細めてナムルを見た。もしや、この男は父親に通じているスパイなのだろうか。

「小ワープ回避が気になるなら、準備する時間を与えないように奇襲をすれば良いだけのこと」ザールは言った。

そしてナムルの反論を待たずにザールは正面を向いて宣言した。「全艦突撃体型を作れ。連絡には超光速通信を使うな。通常無線だけで連絡しろ。敵に気付かれずに接近して仕留める」

ナムルは何も言わず復唱した。

やはり忠実な副官なのだろうか。

それとも、あまり反論すると疑われると思って反論を差し控えたのだろうか。

ザールにはどちらか分からなかった。

ザールの水雷戦隊から、次々と大形ミサイルが発射されていった。

ディンギル星の切り札。ハイパー放射ミサイルだ。

ミサイルは発射されたあと、確率的な雲となって敵に迫り、標的の前で実体に戻って敵艦に食い込んで放射線をばらまく。この程度のミサイルの炸薬量などたかが知れているので、爆発だけでは仕留められない。しかし、内部に食い込んで放射線をばらまけば乗員を殺傷できる。

事実として、定期点検でドックに回航中のガルマン・ガミラスの総統専用艦を襲撃した際は、水雷戦隊の力だけでは沈めきれなかった。その際に運が良かったのは、あくまで定期点検のための回航であり、総統本人が座乗していなかったことだ。総統本人が載っていれば艦首のハイパーデスラー砲の使用認証が可能で、水雷戦隊は逆襲で壊滅した可能性もあった。しかし、ハイパーデスラー砲が火を噴くことは無く、正規の乗員を欠いた総統専用艦は撃沈までは至らなかったが、修復できないほどのダメージでそ

の後廃艦処分された。その時の戦訓から、乗員を殺傷するための放射線がミサイルに追加されている。これは同じアクエリアスの子らが敵なら有効に機能するはずだった。

その後、ガルマン・ガミラスの総統は先代の総統専用艦 G.スターシアに乗り換え、代艦の建造に取りかかったという。

だが、代艦が完成することはあるまい。それどころか、G.スターシアですら残るか怪しい。

異次元から出現した別銀河がガルマンもボラーも押しつぶして多くの対立を消失させてしまうはずだ。

全てはルガの神の命によって、ルガール大神官大総統が執り行う計画だ。

所属不明の宇宙戦艦への奇襲は成功した。

反撃らしい反撃も受けないまま、宇宙戦艦は近くの惑星に落下していった。

谷の中に落ち込んだ時点で自動追跡レーダーが追跡できなくなった。

「残骸を確認させましょう」とナムルが言った。「自分が指揮を執ります」

「待て」とザールは制した。

それはそうだ。敵か味方か分からない副官を自由に行動させては、何が起きるか分からない。

「我々の任務は水没するディンギルの命運を見届けることだ」とザールは言った。「調査は後方の予備戦隊に任せよう」

「それでは到着まで半日掛かります」

「良いではないか」とザールは言った。「それとも残骸が勝手に飛び立って逃げてしまうとでも言うのかね?」

「そ、それは……」ナムルは困惑した。「もしかしたら残った乗員がエンジンを修理するかも知れません」

「生命反応は既に残っていなかったのは検証済みだ。残ったのは仮死状

態か死人ばかりだ。仮死状態は数時間程度で回復するものではない」
　ナムルは黙りこんだ。
　ザールはナムルの更迭を真剣に考えざるを得なくなった。
　しかし、すぐに考えを改めた。
　ナムルが父親のスパイなら更迭には理由を付けて抵抗するだろう。
　それよりも、今は目の前に置いて監視しておく方が良い。
　ザールは自分でも気付かないまま、ニヤリと笑った。

　副官に残骸確認に行かせないザールの決断は、ザールにとっては最善の選択であるはずだった。
　敵艦には、ハイパー放射ミサイルの数発を直撃させた。理論的に、その状態で生還できる宇宙戦艦など存在しないはずであった。つまり、撃沈は確実であり、残骸の確認など儀式に過ぎなかった。あくまで、貴重なハイパー放射ミサイルを使用した戦果報告書に残骸の写真が必要とされるから行われるに過ぎなかった。つまり、数時間遅れようとも関係無い話であった。これが数年の遅れなら、どこかの星のジャンク屋が残骸を持ち去ってしまう可能性があったが、大型戦艦は数時間で持ち去れるほど小さくはない。
　しかし、ザールはまだ若かった。
　自分が見落としたものが何かをまだザールは気付いていなかった。
　迎撃不可能で乗員を無力化することを主眼としたハイパー放射ミサイルは、本当の意味で相手の宇宙艦を撃沈していたわけではないのだ。エンジンと自動航法システムが無事なら、相手の宇宙艦は航行を続けることも可能だったのだ。もちろん、単純な自動制御で稼動する宇宙艦との戦闘で負ける気などザールには全く無かった。だが、宇宙艦の自動操船装置が単純な作りなら、戦闘などは可能性として想定されず、ただ母港に帰投する行動しか起こさない可能性もあった。

まさにザールが撃沈したと思った宇宙戦艦ヤマトとはそのような旧式艦であった。

惑星に落下した時の衝撃で偶然に自動操船装置のスイッチが入ったヤマトは、自動操船装置が知っていた唯一の行動、つまり母港への帰投を開始した。その判断には敵との交戦も想定されていなければ、敵への警戒も含まれていなかった。

だから、ヤマトはただ上昇してワープした。

ザールが即座に残骸の調査に取りかかっていればすぐに察知できただろう。

だが、予備戦隊を呼び寄せることにこだわったザールは見落とした。しかも、ザールは、予備戦隊からの報告書を見なかった。残骸は発見できなかったという報告など想像もしていなかったザールは、分かりきった結果など知ろうとはせず、報告書も読まなかったのだ。予備戦隊の方も、報告書提出以上の作業が必要だとは考えていなかった。戦って勝つことだけがディンギル的な価値観だったからだ。他人の戦果確認の報告など、仕事としての質が劣った。敵が出るかもしれない事態の方が重要であり、事実として予備戦隊もそのあと投入された地球爆撃で彼らは心が躍った。残骸が無かったことなど、彼らもすぐに忘れてしまった。

結果として、ザールは取り逃がした宇宙戦艦から、その後 2 回の敗北を喫することになる。しかし、この時点でのザールはそのような可能性を一切考えていなかった。

移動神殿要塞ウルクに戻ったザールは父親のルガール大神官大総統に報告した。

「ディンギル星は、特殊な組成がアクエリアスの水と反応したのか大爆発して消えました」少しわざとらしいかな、と思いながらザールは報告した。

実際にディンギル星を爆破したのはザールとその部下だ。けして勝手に爆発したわけではない。そもそも、水と反応して惑星が消えるほどの爆発が起こるような物質があるのかも知らないし、それがディンギル星にあるのかも知らない。

しかし、ルガール神官大総統はうなずいた。

明らかに彼の興味は、既にディンギル星にはなかった。

それよりも、これから行われる大星間戦争に向いていた。

ルガール大神官大総統のルガールの名前は『ルガの言葉を聞く者』という意味だ。本当の名前ではない。ザールも、ルガールの名前を受け継ぐことが期待されていて、正式にはルガール・ド・ザールと呼ばれる。

よもや、ルガを裏切り敵対するアクエリアスに心酔しているなどとは夢にも思っていないはずだ。

だから、ルガール大神官大総統は満足げにザールに命じた。

「おまえを地球攻撃部隊の指揮官の命じる」

「はっ!」

ザールは喜んでそれを受け入れた。

この時点で、ルガに心酔するルガール大神官大総統と、アクエリアスに心酔するザールの思惑は一致していた。ルガール大神官大総統は地球から邪魔な地球人を一掃するために、地球人を地球に封じ込めた上で水惑星アクエリアスをワープさせる気だ。アクエリアスの水で地球を全て水没させ、地球人を皆殺しにする気だ。しかし、アクエリアスの考え方もそこからかけ離れている訳では無い。ただしアクエリアスが与えるのは厳しい試練だ。試練に打ち勝つ強い者のみが、クイーン・オブ・アクエリアスの眼鏡に叶い、地球の未来を背負う権利を得るのだ。つまり、地球人を皆殺しにするか否か、タイミングがすぐか 6000 年後かという点では異なっているものの、地球人を地球に封じ込めて地球を水没させるという思惑だけは一致していたのだ。しかも、アクエリアスの悠久の時の流れからすれば、6000 年

は誤差のようなものでしかなかった。
　ザールは、今回は心おきなく出撃できた。

　ザールの旗艦での会議はすぐに紛糾した。
　地球人の封じ込めという大目標では一致したものの、状況認識と対象方法はなかなか同意が得られなかったからだ。
　特に、ザールとナムルの対立が大きかった。
　既にディンギル星が存在しない以上、戦力が補充されることはあり得ない。だからザールは戦力を大切にした方が良いと考えた。そのためには正面切った決戦よりも計略を、敵艦隊との交戦よりは移民船の襲撃を、戦闘行動中の敵艦との交戦よりも停泊中の敵艦の撃破を優先すべきだと考えていた。
　しかし、ナムルは艦隊決戦で優位の誇示を行うべきだと考えていた。優位は長期間維持できないので、なるべく早めに印象づけた方が良いというのだ。
　問題は、地球艦隊が持つ波動砲だった。
　弱点が多い兵器だが、上手く決まれば単艦でも戦局をひっくり返せる。
　ザールは波動砲の射程外から水雷艇や攻撃機を送り込むアウトレンジ戦法が良いと思っていた。それで波動砲を無力化できるなら、無理をすることもない。
　しかし、ナムルは違った。敵正面に陣取り、小ワープで波動砲を回避すべきだというのだ。
　もちろん、上手く行けばナムルの作戦は絶大な効果を発揮する。波動砲を撃ってエネルギーを失った地球艦隊など、あっさりと蹴散らせるからだ。しかし、もしタイミングを間違えれば簡単は全滅しかねない。非常にリスクの高い方法だった。
　結局、参謀長が玉虫色の提案を行った。

ザール案とナムル案の折衷で行こう、となったのだ。
まず、地球脱出船団を襲撃し、地球艦隊主力を誘出する。そこで、艦隊決戦を強いて撃破。その後、第2次艦隊決戦の準備が整う前に艦載機で地球を急襲。反撃体制を奪うというものだ。
作戦は驚くほど良好なペースで進行した。
ザールの艦隊は、地球脱出船団を撃破すると、押っ取り刀で出てきた地球艦隊を返り討ちにした。波動砲の小ワープ回避は上手く機能し、地球艦隊を一気に押し切ることができた。その後の地球艦隊は、あっけないほど弱かった。ほとんどの敵艦は、反撃らしい反撃をすることもできず、地上で撃破された。
ザールは旗艦で考えた。
あまりに上手く行きすぎている。
ここで何かのしっぺ返しを食いそうだ。
そのとき、ナムルが振り返った。
「あまりにも上手く行きすぎです」と彼は言った。
考えていることが同じなので、ザールは驚いた。
「副官、では次に何が起こるというのだね?」
「ここで兜の緒を締めないと、手ひどい敗北を喫するかもしれません」ナムルは答えた。
ザールは副官がそこまで同じ事を考えていたことに驚いた。
「では何が必要だと思うのかね?」
「新しい作戦が要ります」とナムルは言い切った。「我々の手の内は一通り相手に見せてしまいました」
「なるほど」
しかし、2人とも妙案は無かった。

地球最後の宇宙艦隊が出てきた。

中心は、ディンギル付近で遭遇した宇宙艦と似ていた。
「同型艦か」とザールはうなずいた。「ならば恐るるに足らない。既に撃破済みだ」
この時点でザールには慢心が生まれていた。しかし本人は気付いていなかった。あれは同型艦ではなく、撃破したと思った宇宙艦そのものだった。つまり、既に撃破などはしていなかったのだ。
しかも、ザールは戦闘中に妙案すら思い付いていた。
「ナムル、あれを見ろ」
「僚艦が盾になってハイパー放射ミサイルを防いでいますね」
確率の海として移動するハイパー放射ミサイルは、通常迎撃ができない。しかし、宇宙艦のような巨大質量を手前に置けば、そこで実体化して防ぐことができる。
「このまま、攻撃が一段落したら全機を撤収させるのだ」とザールは言った。
「敵に塩を送るのですか?」
「いや。こちらが引き上げれば生存者を救助するだろう。そこを奇襲すれば敵を容易に減らせる」
「準備させましょう」ナムルが嬉々と部下に指示を出した。
作戦は成功だった。
敵は無人艦を盾にしようとしたが数が足りず、有人艦も盾にした。そして攻撃隊が引き上げると生存者の救助に救命艇とスタッフがわらわらと出てきた。
ザールは指示を出すだけで良かった。
待機した別働隊が彼らを殲滅した。
第2次攻撃を行うための準備も順調だった。
波動砲の射線上には小惑星群があり、うかつには撃てないはずだったし、そもそも彼らからは小惑星の影になる位置で待機していた。

勝利は確実だった。

ザールとナムルはニヤリと笑って顔を見合わせた。

まさにそれが慢心そのものだった。

ザールとナムルが協力して実行した作戦なので、既に苦言を呈する者が残っていなかった。

いきなり敵戦艦から超長距離砲撃を受けてザールは狼狽した。

「何事だ!」

「これは波動カートリッジ弾です!」部下が報告した。

波動カートリッジ弾は、波動砲のエネルギーを詰めた砲弾で、威力は格段に劣ると聞いていた。だから、対策をあまり考えていなかった。波動砲対策さえ万全なら問題は無いと思っていた。

しかし、ミサイルを満載して出撃直前の水雷艇には致命傷だった。

波動カートリッジ弾はミサイルに点火するだけの威力があれば良かったのだ。後は味方のミサイルの誘爆が、味方水雷戦隊に自動的にとどめを刺した。

水雷戦隊は壊滅し、ザールの旗艦はウルクに帰還する以外になかった。

旗艦が残ったのは偶然以外の何者でもない。旗艦よりもより撃たれにくい位置にいた僚艦も撃破されているのだ。しかし、それが本当に幸運であるのかは分からない。あたかも、臆病風に吹かれて敵弾から逃げてきたかのように見えてしまったからだ。ザールとナムルは 2 人とも、そのような風当たりに直面するリスクを認識せざるを得なかった。

第 2 章　ルガール大神官大総統

ルガールの悩みは大きかった。

ディンギルの現在の行いは、ルガの神への信仰を前提としたアクエリアスへの叛逆だ。ウルクをワープさせるエネルギーをアクエリアスから採取しているのはアクエリアス人が死滅して物理的強制力を持っていないから

可能になることだが、未だに思想的影響力は残している。
　そもそも、ディンギル星人は、アクエリアス人によって洪水から救い出された地球人の末裔だ。それがアクエリアスに反旗を翻すなど、物事の筋が通らないように見える。
　しかし、ディンギルはアクエリアスの呪縛を断ち切らねばならない。ルガールはそう信じていた。そのためには、ディンギルのあらゆる力を結集して一点に集中して突破するしかない。長期戦ができるほどの余力は無いのだ。事実として、ディンギル星そのものは既に犠牲として差し出した。爆発したのは想定外だが、洪水で人民が滅亡することまでは想定内なので、結果に大差はない。
　それよりも問題が大きいのはザールが負けたことだ。
　途中までは順調に進んだのだが、順調すぎるのが慢心を生んだようだ。
　あらゆるケースを想定した万全の準備が逆効果だったらしい。
　それに加えてルガールを悩ませたのは、お目付役として付けた筈の副官のナムルまで、一緒になって浮かれて慢心したらしいことだ。
　「ザールとナムルが参りました」と秘書が告げた。
　「通せ」とルガールは命じた。
　2 人が入ってきてルガールの前に並んで立った。
　ナムルが封書を差し出した。
　「今回の戦闘の報告書です」
　「ご苦労」とルガールは受け取って、そのまま机の上に置いた。
　「さて」とルガールは言った。「まずナムルの問題についてだ。本来ブレーキ役になるべき副官が一緒になって浮かれていたとは責任重大だ」
　「はっ」ナムルが硬直した。
　「しかも、現在のディンギルにゆとりは少ない」
　「分かっております」
　「ならば、どう責任を取る」

「この命に代えましても」
「そうか。命か。良い心がけだ」ルガールは拳銃をナムルに向けた。
ザールとナムルが 2 人とも驚いた表情になった。
「ならばこの場で死ね」とルガールは撃った。
「父上!」とザールが叫んだ。しかし、ナムルを助けるには手遅れだった。
ナムルはその場で崩れ落ちた。逃げるゆとりもなかった。抵抗するゆとりもなかった。
「なぜこのようなことを」とザールは叫んだ。「ナムルは父上が差し向けたスパイだと思っていました」
「スパイ?　何をスパイするというのだ?」
「いえ……、その……」
「ザール。話がある。ついて来い」
ルガールはザールを連れて神殿に歩いた。
そして、ルガの像の前でディンギルの秘密を説明した。
ディンギルはアクエリアスに助けられた地球人類の末裔だという話だ。
そして、ルガールはルガの前で宣言した。
ザールこそが後継者だと。
ルガの前で宣言すること。それは絶対に違えてはならない約束であること意味した。
ザールは驚き、感動していた。
この約束が無効になるのは、当事者のどちらかが死んだときだ。
つまり、ルガールかザールが死んだときだ。
「残余戦力の全てをおまえに託す」とルガールは宣言した。「ヤマトを討て」
「はっ!」ザールは姿勢を正した。
「なぜナムルは処罰しておまえには何もしないか分かるか?」とルガールは質問した。

「息子だから……でありますか?」
「そうではない。そこまでの公私混同はできない。公私混同するぐらいなら、おまえの母親と弟もウルクに乗せている」
「ではいったい……。そこまで厳しい父上がなぜ自分に甘い態度を……」
「実績だ」
「といいますと?」
「おまえは既にあのヤマトの同型艦を撃沈しているではないか」
「それが実績……」
「そうだ。おまえの成績はまだ1勝1敗でしかない。チャンスはまだある」
「ではナムルは……」
「彼の実績は1勝2敗だった」とルガールは言った。「おまえの副官になる前の実績も入れるとな。今回は3敗目だった」
「それで射殺を……」
「そうだ。だからもう慢心はするな。必ずヤマトを討て」
「もう手加減はしません。全力でヤマトを討ちます」
ザールは敬礼すると、そのまま走って出て行った。
ルガールは自分の執務室に戻った。
ナムルの報告書の封筒は見る気も無かったので横にどけて仕事を再開した。
轟音がして、窓の外を艦隊が出撃していった。ザールの艦隊だろう。ルガールは満足した。

ヤマトの行動は容易に予測できた。
アクエリアスのワープ阻止こそがヤマトの目的だ。つまり、ヤマトはアクエリアスに来る。当然、ザールもアクエリアスで罠を張れるわけだ。
都合が良いことに、ウルクの動力源を採取するための重水プラントがア

クエリアスの海上にある。あそこを根城に活動すれば、ザールにも都合が良いだろう。

ザールの部隊がアクエリアスでヤマトと戦闘に入ったという報告が届いた。

これは良い兆候だ。昔からアクエリアスをよく知っているディンギルと、アクエリアスに来たばかりのヤマトでは地の利が違う。多少のヘマをしても、ザールはヤマトを仕留められるだろう。ルガールはそう信じられた。

その時、ルガールの目にナムルの報告書が見えた。

そういえば、まだこの報告書を見ていなかった。

都合の良い成り行きに心が広くなったルガールはその報告書を手に取った。

その時、もう１つの封筒が存在することに気付いた。

こっそりともう１つの封筒がナムルによって手渡されていたのだ。

そちらには何も書かれていなかった。

ルガールはそれを開いた。

そして、ルガールの目が見開かれた。

話の要点は２つしかない。

１ つは、ザールが撃沈したはずの宇宙戦艦と、現在交戦中のヤマトは同型艦ではなく同一の艦であること。つまり、ザールは撃沈したと主張しただけで実際には撃沈していないこと。

もう１つは、ザールがアクエリアス信者であり、ルガの神を信仰していないことだった。アクエリアスの指示でザールは動いており、ディンギル星の爆発もけして特殊な組成に水が入ったことによるものではなく、ザール自身による爆破だと書かれていた。そして、ザール自身がルガールの後継者になる気は無く、いつでも寝首をかく用意はできていると。

ルガールは猛然とウルクの司令室に向かった。

ザールの成績は、１勝１敗などではなかった。０勝２敗だ。ならば今回

も負けるかも知れない。負けたら0勝3敗だ。1勝3敗で死んだナムルよりも酷い。
司令室で状況を把握したルガールは愕然とした。
ザールは戦闘で負けつつあったのだ。
ルガールは決断しなければならなかった。
ルガの神の前で、ザールを後継者にすると宣言してしまった。
しかし、ルガの神を信仰せず、アクエリアスを信じる息子が後継者になれるはずもない。しかも、今まさに負けつつある。
ザールが戦闘指揮機で戦場から脱出してきた。
ウルクの防衛戦力をあてにして、助けてもらおうとしているのだ。
「ニュートリノビーム防禦幕、放射」とルガールは命じた。
まわりのスタッフが驚いてルガールを見た。
それはそうだ。息子を殺す命令そのものなのだ。
ニュートリノビーム防禦幕が展開されれば、ザールはもうウルクに戻れない。ヤマトへの防備を固める必要があるとは言え、それはまるで親子の情にももとる行為に見えるだろう。
しかし、ルガールはそうせざるを得なかった。
ザールはルガールに嘘をつき、裏切ったのだ。
ルガの神など信じてもいないのに、喜んで後継者の立場を受け入れたのだ。
「聞こえなかったのか!」とルガールは叫んだ。「ニュートリノビーム防禦幕、放射」
ザールの悲鳴は途中で途切れた。
だが、感傷に浸っている時間など無かった。
波動砲口から波動エネルギーをリークさせるという思いも寄らぬ方法で、ニュートリノビーム防禦幕を中和してヤマトがウルクに突っ込んできたからだ。

「アクエリアス20回目のワープを急げ。それまでヤマトを支えておけば良い」

「しかし、主力艦隊が壊滅している今、支えると言っても……」

確かにそうだった。ルガールは頭を切り換えた。地球側には既に残された主力艦隊は無いが、ディンギル側ももう無い。ならば互角だ。まだ負けが決まった訳では無い。

「ウルクの全ての戦力を出せ。何としても守り抜くぞ。我々にはもう帰るべき母星はないのだ」ルガールは命じた。

「暴徒鎮圧用の警備機もでありますか?」と部下が質問した。

「あの腹這で乗り込んで飛ばす奴か?　もちろんだ、あれも出せ」

「身体を剥き出しにして乗るので、武器を持った相手には危険です」

「正規の軍用機も消耗し過ぎた。危険でも使うしかない」

「では神殿のロボットホースは……」

「あの儀式用の馬型ロボットか。徒歩で戦うよりもマシだ。準備させろ」

「しかし、一般兵はロボットホースの乗り方など知りません。あれの経験があるのは儀式で乗った近衛だけです」

「分かった、近衛はロボットホースに騎乗して戦闘せよ。私もあれに乗る」

「危険です!」

「これは天命なのだ」とルガールは叫んだ。「息子を殺した男が罪人ならば私は死ぬ。だが、ルガの神を信じない愚か者を粛正した英雄ならば生き延びるであろう。ともかく全軍に伝達。アクエリアスの20回目のワープまでなんとしてもヤマトを支えるのだ」

ルガールはそのまま神殿に向かった。

部下は返事をせず呆然とルガールを見送った。

自らの手で息子を死なせた男として、責任を取りに行くのだと理解したのだろう。

しかし、ルガールの心情は必ずしもそうではなかった。

ただルガールは心が燃えていたのだ。

もはやここまで来たら自分の振るまいが正しかったか否かなど悩む意味は無かった。既にディンギル星は失われたのだ。

ただ、自ら強き者の手本となり、未来を切り開くしか無い。

そこで、ルガールはふと１つのことに気付いた。

アクエリアスの何度目かのディンギルの接近に伴い、国論は２つに割れた。

ディンギルの水没はアクエリアスの試練であり、受け入れるべきだというアクエリアス信者、そして、水没を拒絶してアクエリアスそのものをワープさせるべきだと考えるルガ信者。ルガ信者は神殿要塞ウルクを建造してアクエリアスをワープさせる能力を獲得した。しかし、多数派のアクエリアス信者によって使用は拒絶された。ルガ信者に許されたのは、ウルクでディンギルを離れることだけだった。

しかし、ディンギル水没に伴い、ルガ信者の行動に異を唱える者は消えた。ルガ信者は行動の自由を獲得し、アクエリアスを、試練を与える神秘の星ではなく、対地球の戦略兵器として用いている。

だが、結果としてアクエリアスを地球に接近させ、地球を水没に導くという行動そのものは同じではないか。勝つための手段か試練かの差はあるが、現象だけ見れば同じことだ。だから、隠れアクエリアス信者だったザールと、ルガ信者のナムルは嬉々として協力して戦えた。

ならば、ルガの神とアクエリアスの神の差とはいったい何なのだ?

しかし、ロボットホースに騎乗したとき、ルガールの迷いは消えた。

この戦争に勝ち、地球を手に入れて移住する以外にルガ信者の生きる道は残されていない。アクエリアスは居住するには土地が少なすぎ、しかもすぐに恒星が無い宇宙に回遊して出て行ってしまう。アクエリアスをワープさせ恒星の周回軌道に乗せることは容易だが、それでは不十分なのだ。

「死に神よ我を守りたまえ」ルガールは近衛の先頭に立って突撃した。

第３章　古代進

「ここのままではダメだ」と古代は思った。

ウルクのワープ光線発射施設を主砲で砲撃させているが、それでは不十分だ。障害物が多く、着地したヤマトからは狙いにくいのだ。

そのことを見越して、古代はコスモタイガー隊にも発進準備を指示していたはずだった。しかし、結局、手空きの者は全員で白兵戦に出ているが、コスモタイガー隊員も白兵戦に駆り出されている。

沖田の采配が良くないのだ。

古代はそのことをずっと感じていた。

初代ヤマト艦長沖田十三はいわば神さまだ。

ヤマトを指揮して地球を救った男だ。

だから誰もが彼の復帰に期待する。

しかし、沖田は、明らかに過去の人間だった。

ガミラス戦役以後に追加された装備に対してあまりに無知であり、それ以後に改変された艦内組織に無知であり、新しい戦訓や戦術にあまりも無知でありすぎた。

古代は自分が辞表を書き、沖田のバトンタッチしたことが良いことか悩むことしきりであった。

たとえば、冥王星海戦の際もそうだ。古代がコスモゼロで偵察して波動カートリッジ弾で仕留める。あの作戦は、そもそも古代のアイデアだ。偵察に出たのも古代の自発的な行動であり、しかも頃合いを見て波動カートリッジ弾を装填して待機して欲しい旨は事前に伝えてあったことだ。沖田は波動砲を使う気だったので、古代が慌てて波動カートリッジ弾の使用を進言したのだ。

その以前の艦隊運用にも問題があった。

艦隊の先頭は第2次黒色戦役時代の無人艦だったが、無人艦の操作は島と太助がスペシャリストだった。しかし、沖田は太田に操作させようとした。人材を適材適所に配置する知識に欠けていた。

そして、今もそうだ。本質的に対地攻撃の力も持たないブラックタイガーと違って、コスモタイガーは強力な対地攻撃能力を持つ。絶対に、ワープ光線発射施設攻撃に役に立つのだ。しかし、この状況での活用をあまり考えていない。

唯一、沖田が冴えを見せたのは、波動エネルギーをリークさせてウルクに着陸するところだけなのだが、そもそも波動エネルギーのリークでニュートリノビーム対策になることは偶然発見された対処法に過ぎない。沖田が発見した訳ではないのだ。

沖田は立派な男であり、古代は好きだ。しかし、昔の冴えはもう無い……。

それが古代の感想だった。

しかし、もう待てない。

アクエリアスがワープしてからでは遅いのだ。

「加藤」と古代は呼びかけた。「今からコスモタイガーを発進できるか?」

「無理ですよ。ヤマトがべったり着地してますから発進口が塞がっています」

「ヤマトを上昇させないとダメか?」

「いえ。艦尾を少し持ち上げてくれれば発進させますよ」

「危険じゃないか?」

「それでヘマをするヘボは部下にいません」加藤がニヤリを笑った。「ただし、発艦の瞬間だけは敵に狙われないように支援して下さい」

「分かった。コスモゼロはカタパルトで先行して打ち出せる。俺が支援する」

「なら後は艦尾をちょっと持ち上げてもらうだけです」

古代は島に声を掛けた。
島は苦しそうな声で返事をした。
「よし、加藤。コスモタイガー隊員を集めて発進待機」古代は命じた。「時間が勿体ない。飛び出したら、すぐにあのワープ光線発射施設を攻撃」
「了解。全機対地攻撃装備で待機させます」
加藤が走り去ると、島もブリッジに戻ったことを確認し、古代は格納庫に連絡した。
「俺のコスモゼロを無人のままカタパルトに上げてくれ。甲板から乗り込む」
「無人って、敵が先に乗り込んだらどうするんですか!」
「その時は遠隔操作で自爆させろ」古代は叫んだ。「今は時間が無い」
古代には確信があった。
ロボットホースに乗って攻めてくるような相手なら、無人の敵戦闘機に乗り込むような真似はするまい。それに乗られても操縦方法は分からないに違いない。
このときの古代には、既に沖田の存在は頭になかった。
現場で指揮を執っているうちに、艦長時代の感覚が戻ってきて沖田に了解を取らずに次々と指示を出していたのだ。
そして、沖田はそれを黙認していた。
何も異論を差し挟まなかったのだ。
攻撃の主体を主砲からコスモタイガーに切り替えたのは正解だった。
一般論では主砲の方が、破壊力が大きいのだが、ヤマトが移動できない状況下では１方向からしか攻撃できず、しかも障害物が多いとなかなか思うように狙えなかった。しかし、コスモタイガーなら自由な角度から狙えた。弱そうな部分を見つけたらそこを集中的に狙うのも容易だった。
しかも、ここで波動カートリッジ弾は使用できなかった。ニュートリノビーム放射膜外からでは届かず、かといって中で撃つと距離が近すぎた。

ここで炸裂させれば、ヤマトまで巻き込んでしまう。
　コスモタイガーの攻撃であっさりとビームは停止した。
　対地攻撃装備のコスモタイガーによる空襲の打撃力は、ブラックタイガーの比ではない。しかも、空戦主体で名声を獲得した加藤三郎と違って、指揮を執る弟はいくら顔が似ていても別人だ。彼は対艦対地攻撃もみっちり仕込まれた堅実派だ。彼が見せるサーカスは、建物スレスレに降下しながらの対地攻撃だ。兄貴のサーカスとは魅せ方が違う。
　しかし、ホッとしたのもつかの間、ビーム照射が再開された。
　「どういうことですか、真田さん!」と古代は無線でコスモゼロからヤマトに問い合わせた。
　「おまえたちが破壊したのは制御施設だ。ビーム本体まで破壊したわけではない。あれはこの要塞に埋め込まれていて容易には破壊できない」
　「つまり、予備のコントロール施設があったのだと……」
　「この要塞は、神殿を中心に構成されている。予備のコントロール施設があるとすれば、おそらく最も警備厳重な神殿だ」
　「分かりました」
　そこで沖田から指示が出た。
　「古代とコスモタイガー隊は直ちに帰還、主砲では上手く狙えない。陸戦隊を編成して神殿に向かわせる」
　しかし、古代に言わせればそれは愚策だった。時間が掛かりすぎる。
　コスモタイガー隊は対地ミサイルを撃ち尽くして確かに無力だ。
　しかし、残った敵は少数だ。
　神殿内部で追い詰めれば良い。
　古代は無線で叫んだ。
　「艦長。このままコスモタイガー隊を率いて神殿に強行着陸して敵を追います」
　「分かった。古代、君に任せる」

古代は指示した。「全機、前方の神殿に向かえ」

近年改修されたコスモタイガーとコスモゼロの不整地着陸能力はかなり高い。短い直線区間が確保できれば、そこに機体を下ろせる。沖田の指示はそれを意識していないものだ。だが、古代ならそれを意識した上で作戦を組みたてられる。

迎撃の対空砲火があり、数機が落とされてしまったが、古代らの勢いを止めるほどの力はなかった。

神殿前の広場の空間に次々とコスモタイガーが着陸した。

この広場では、おそらく信者を集めて儀式を行っていたのだろう。

広場は十分な面積があった。

古代はコスモゼロを飛び降りて神殿内部に向かった。

神像の前で銃撃戦になったが、そこは加藤らに任せて古代は先に進んだ。

古代がエレベーターに駆け込むと、ディンギルの少年アルリムも駆け込んできた。

「アルリム、なぜ君がここに」

「古代さん、父がいます。追いかけてきました」

「お父さんが?」

「白いロボットホースに乗っていました。神殿に入るところも見ました」

古代は考え込んだ。

白いロボットホースに乗った男は古代が見た限り 1 人しかいなかった。おそらくあれこそが指導者、この要塞の指揮官だ。古代が 1 人だけコスモゼロに乗ってコスモタイガー隊を率いたように、1 人だけ白いロボットホースに乗って、その他の一般型のロボットホースを率いていた。

「アルリム」と古代は言った。「重要なことを聞くぞ」

少年はうなずいた。

「君のお父さんは、ディンギル星人の指導者なのか?」

少年は首を横に振った。「違うよ。ルガを信奉する人達の指導者に過ぎな

いよ。全てのディンギル人の指導者ではないよ」
　しかし、少し間を置いて少年は言った。
　「でも、ルガを信奉していない人達はみんなディンギル星ごと死んだはずだから、生きているディンギル人は僕以外全て父さんの指揮下にあると思う」
　「では君はここを知っているのか?」
　「何度も来たことがあるよ」
　「どこに君のお父さんがいるのか分かるか?」
　「分かると思う。たぶん予備ワープ制御室だよ。そこに案内できる」
　その瞬間、古代は悟った。
　古代の行いは間違っていなかったのだ。

　あの時、そもそも古代の任務はディンギルとは関係無かった。
　異次元から出現した別の銀河によってデスラーのガルマン・ガミラス帝国が壊滅しつつあったことの調査が目的だった。
　しかし、デスラーの命運は既に尽きていた。
　ヤマトが到着したデスラーパレスは既に無人の廃墟だった。
　ヤマトは近くで起きた惑星の衝突を回避するためにランダムワープを行い、そこで水没しかかっているディンギルに出会ったのだ。
　古代は躊躇なく生存者の救出を命じた。
　しかし、困難な救出活動は上手く行かなかった。
　ヤマト搭載機のコスモハウンド１機と多くの乗員の命を失い、代償として助けられたのは少年１人だけ。アルリムだ。
　あまりにも多くの損失を出して助かったのは少年１人だけとはあまりにも問題が大きすぎた。
　だから古代は自分の軽率を悔やみ、辞表を書いたのだ。
　しかし、今のこの状況はどうだ。

助けた少年は、敵の大将の息子で古代に居場所を教えてくれようとしている。
どれほどの機材と人員の損失を出そうとも得がたいメリットだった。
何しろ、今は全人類の滅亡か生存かという大きな問題がのしかかっているのだ。もしも、アルリムのおかげで敵の指導者と面会できるなら、どのような犠牲を払う価値もあった。守るべきはヤマトでは無く地球なのだ。
そしてもう１つ重大な事実に気付いた。
彼らは帰るべき星を失った宇宙の流浪の民なのだ。
だから移住先を求めている。それゆえに地球を侵略しようとしている。
だが、地球は移民を受け入れない星というわけではない。
話し合いによる解決は可能だ。
アルリムの案内で古代は奥に進んだ。
だが、話し合いは上手く行かなかった。
敵の指導者ルガール大神官大総統は、古代による話し合いの申し出を蹴った。
ある意味で当たり前だった。アクエリアスのワープ準備は順調に進行中だった。一方でヤマトは既に打てる手が無かった。負けつつある側が勝ちつつある側に和解を申し入れても、受け入れるはずがなかった。
あくまで説得を試みた古代だったが、ルガール大神官大総統は、銃を抜いていない古代に銃を向けて撃った。
アルリムが身を挺して古代を守ったので、古代は無事だった。
しかし、アルリムは死んだ。
つまり、子殺しだ。
古代は怒りに燃えた。
それはルガールがアルリムを殺したからではない。
親も同然の沖田が、子も同然のヤマト乗組員や僚艦に死を強要するような作戦を採らせたことに対する怒りが、これを契機に火を噴いたからだ。

ルガールの振る舞いは、意図的な子殺しでは無い。あくまで古代を撃ったはずなのだ。しかし、アルリムが身を投げ出して子殺しになってしまっただけかもしれない。本当に子供を殺す殺意がルガールにあったのかは分からない。もちろん、ディンギルに置き去りにした時点で既に殺意があったとは言える。しかし、銃で撃ち殺すほどの殺意があったのかは分からない。

しかし、そのことは古代にはあまり関係が無かった。

他の怒りが古代を突き動かしていたからだ。

古代はアルリムの亡骸を抱きしめて叫んだ。

その時、アクエリアス最後のワープが実行されつつあった。

ヤマトのワープ阻止作戦は失敗に終わったのだ。

激しく地面が震動した。

古代はアルリムの冥福を祈ると亡骸を置いて神殿から飛び出した。

コスモゼロで離陸すると、大要塞が崩壊しつつあった。

ルガールが大要塞を自爆させつつあることは明らかだった。

理由も古代には良く分かった。

アクエリアスの最後のワープが完了した今、既にワープ光線発射機としてのこの巨大要塞に存在意義は無くなったのだ。むしろ、ルガールにとって、重荷とすら言えた。彼が必要としたのは移住先であって、要塞ではないのだ。

加藤達のコスモタイガーと合流すると古代はヤマトに帰還した。

そして遭遇したのは、既に死にかけた島の姿だった。

「お袋の胸に抱かれているみたいだ」と島はヤマトを母親に喩えて言った。

「おいっ!　島っ!」

そして、古代と雪の関係を案じながら息を引き取った。

「島っ!」

古代は島を抱きしめて泣いた。
そして理解した。
島の死因は、ヤマトを巡る銃撃戦での負傷だ。
その銃撃戦に島まで動員する必要があったのか。
もしも古代が艦長なら島まで銃撃戦には出さなかっただろう。
島を殺したのは事実上沖田も同然だった。

第４章　沖田十三

沖田は花園で目覚めた。
「ここはどこだ」
「英雄の庭園です」と横で記憶のある美しい女性の声が聞こえた。
しかし誰だか思い出せなかった。
半透明の薄衣をまとい、背中の羽のある美女が沖田を助け起こした。
「わしは死んだのか。ここは天国なのか」
「最初の質問はイエスです。あなたは宇宙放射線病が悪化して死亡しました。しかし、ここは天国ではありません。英雄の庭園です」
「英雄の庭園とは何だ?」
「アクエリアスの目に叶った英雄が死んだ後に集められる園です。アクエリアスの助言者になることが期待されています」
「アクエリアス?　アクエリアスとは何だ?」
「生命の芽を含む水を宇宙に撒き続ける回遊惑星です。かつて地球にも水が撒かれました。そして、アクエリアスの女王もまたアクエリアスと呼ばれます」
「生命の源か。しかし、助言と言われても分からない」
そのとき、沖田の知った顔がやって来た。
ドメルだった。
「沖田艦長!　またお目にかかれて光栄です!」と彼は駆け寄ってきた。

「ドメル指令……」

「この庭に招待されたガミラス人は数名、しかも同時代のガミラス人は自分だけと聞き、知り合いにここで会えることは諦めていました。しかし、あなたも会える可能性は考えるべきでした」

「ということは、私も同時代の地球人に会える可能性はほとんど無いわけですな」

謎の美女がうなずいた。「その通りです。英雄の庭園には現在約五千人の英雄がいますが、沖田艦長と同時代の地球人は他に招待されておりません」

「ではドメル指令だけが唯一の知り合い……ですかな」と沖田は起き上がった。「かつての宿敵を唯一の知人として過ごすことになるとは。とても皮肉な運命というべきか」

「沖田艦長」とドメルは言った。「少なくとも私は立場上敵となったが、死してなおあなたに敵対しようとは思っていません。私から誠実な敬意は期待されても構いません」

「私は君の母星を滅ぼしたヤマト艦長なのだぞ」

「ガミラス星の命運は既に尽きていました。そのことで怨みは言いますまい」

「痛み入る」

そこで謎の美女は言った。「では、沖田艦長はドメル指令にお任せします。私は次の招待者を出迎えに行かねばなりません」

「分かった。ありがとう」沖田は礼を言った。「ドメル指令。ここでは何が期待されているのか。説明をお願いできますかな?」

「説明しましょう」

ドメルは説明した。

アクエリアスの使命は2つ。

宇宙を回遊しながら生命の種子を含む水を各惑星に与えることと、発生した生命に試練を与えることだった。多くの場合、試練は洪水という形で

与えられた。しかし、ある程度発達した種族になると、様々な問題を発生させた。惑星を移動させて試練を回避しようとする者達もいれば、アクエリアスの軌道を変えようとする種族もあった。武力で敵対する種族もあれば、懇願してくる種族もあった。

その都度アクエリアスは対応の検討を迫られるのだった。

英雄の庭園とはその際の対応を助言するために用意されたものだった。

時代も種族も様々な英雄が、話し合って女王に助言をするのだ。

「私は既に１回、その話し合いに参加しました」とドメルは言った。「試練を与えると言っても、実際には多くの命を奪うことなので、それほど気持ちが良いものではありません。しかし、あくまでアクエリアスの望みは死を含む試練です」

「ふむ……」と沖田は考え込んだ。

「やはり沖田艦長も承服できませんか」

「確実な死を含む試練とは、普通ではありませんな」

「私もそう思います」とドメルはうなずいた。「軍人は特殊な職業であり、死を覚悟して取り組むのが当たり前とは思います。しかし、一般人にまで死を求めるのは求めすぎです」

「反対意見は出ないのかね?」

「多く出ています」

「しかし、アクエリアスの望みはあくまで死を含む試練なのかね?」

「はい」

「アクエリアスはどのようにして死を肯定しているのかね?」

「死こそが新しい生にチャンスを与える手段だと」

「一理はある。一理はあるが……」

「確かに、一理はありますが、極論です」ドメルもうなずいた。「しかし我々に出来ることは助言までです」

「みな納得しておるのかね?」

「納得はしていませんが、みんな遠きアクエリアスの子らです。アクエリアスの水から発生した種族の末裔は最終的にアクエリアスには逆らえません」

「では、アクエリアスが意見を受け入れてくれることを祈るほかに、ここでできることは無いのかね?」

「あります。ここには、プロジェクション装置というものがあり、死んだ者達を現実世界に投影することができます。空や宇宙に浮かぶ幻として投影することも、あたかも生きている人間のように等身大に投影することもできます」

「まさか。では、これまであちこちで聞いた既に死んだはずの英雄の助言を得たと言う話は……」

「ただの夢かも知れませんが、一部はプロジェクション装置によるものでしょう」

「なるほど……。それは、もしも地球に試練が及ぶとき、事前に警告を発しに行くことは許されている。そう理解してよろしいのですかな?」

「その通りです。ガミラス人は滅んだ以上私には無意味です。しかし、地球人は生き延びた以上、意味があることでしょう。ただし、問題はその警告に意味があるかです」

「といいますと?」

「アクエリアスが次に地球に達するのはおよそ六千年後だといいます。そのとき、沖田十三の名を覚えている人類がどれほど残っているか……」

「なるほど。誰も知らない無名のジジイがいくら試練の危機を叫んでも、誰も話を聞いてくれないわけですな」

「そうです。だからアクエリアスの試練は常に試練であり続けてきたそうです」

「なるほど」沖田は考え込んだ。

六千年後……。

人類がそれまで生き延びているか分からない。生き延びていても、沖田の名前など忘れ去られているだろう。関与できることは多くないかも知れない。

「失礼ですが、ガミラス将棋をご存じですかな?」

「いや」と沖田は首を横に振った。

「ここは退屈なのでルールをお教えしましょう。それから地球にも似たようなゲームがあればお教え頂きたい」

「いいでしょう」

沖田はドメルと将棋を始めた。

その後、何回か会議が招集され、沖田とドメルは出席した。

しかし、縁もゆかりも無い惑星に対する試練について、それほど熱心な意見があるわけでもなかった。

新しい惑星に生命の種子を蒔くことには賛成したが、死を前提にした試練には消極的に反対の意志を示すにとどまった。

ある日、ドメルが興味深い資料を持ってきた。

「平行宇宙という概念をご存じですか?」とドメルは言った。「たとえば、私はバラン基地に赴任してヤマトに相まみえたが、他の平行宇宙では私はバラン基地に赴任することなく、いきなり七色星団でヤマトに挑戦しています」

「可能性としての概念ならば存じています」

「ならば話が早い。平行宇宙のあなたがプロジェクション装置を使った事例の情報を入手しました」

ドメルは記憶キューブを再生した。

「これは平行宇宙の西暦 2201 年のヤマトです」とドメルは説明した。

ヤマトの第 1 艦橋に古代がいた。そして沖田のレリーフが飾られていた。

そこに、プロジェクション装置で投影された沖田か古代に語りかけていた。

古代は敗北に瀕していた。
しかし、プロジェクション装置で投影された沖田は力説していた。
まだ戦う手段はある。命こそが理不尽な暴力に立ち向かう最後の武器なのだ。
その意見に、沖田も賛成だった。
しかし、その力説は肩すかしに終わった。
平行宇宙の古代は、命こそ最後の武器だという言葉を、特攻すべきと解釈してしまった。本当は命さえあれば再起できるという意味なのに、解釈を誤った。これが若さかと沖田はがっかりした。
「こちらの宇宙の古代はどうしているのだ」と沖田は現世の観察装置を使用した。
こちらの世界の古代は、あちらの世界の古代ほど愚かではなく、まだ生存していた。
沖田はホッとした。
「その少年が気になりますか?」とドメルは言った。
「息子のようなものなのでな」と沖田はうなずいた。
「では、プロジェクション装置で語りかけますか?」
「いや。藤堂や土方や山南がよき先輩よき師匠となって彼に影響を与えている。死んだわしの出番など無いさ。このままわしは地球で忘れ去られていくだろう。それで良いと思う」
しかし、幾度めかの招集で、沖田は思いがけない話を耳にした。
その日の議題は、ディンギル人のルガ信者の開発したアクエリアスワープ装置だった。この装置を使うと、六千年も先に起きるはずだった地球とアクエリアスの再邂逅がほんの数日で起こりうるというのだ。つまり、沖田の名が忘れ去られた遠い未来では無く、知り合いが多く残る今にも再邂逅が起こりえるのだ。
あくまで試練は数万年周期で起こるものであったが、恣意的にいくらで

も何回でも引き起こせるとなると宇宙と生命のバランスを逸してしまう。
英雄の庭園は、満場一致で、ルガ教徒の振る舞いは不誠実だと決議した。
決議はしたが、実効力は無かった。

沖田はドメルの力を借りて情報を集めた。
その結果、ルガ教徒は地球への移住を計画していることが分かった。
ディンギル人は、かつて地球で起きた洪水からアクエリアス人が救出した者達の末裔だ。今となっては、なぜアクエリアス人が彼らを助けたのか。なぜディンギルという星に移住させたのか分からない。しかし、それはもう過去のことだ。彼らは地球に戻ろうとしていて、そのために地球人を一掃しようとしている。
それは沖田には容認しがたいことだった。
試練はあくまで皆殺しでは無い。
誰かが生き延びることが暗に想定されていた。
しかし、ルガ教徒の振る舞いは一人も残さない皆殺しに他ならない。
沖田は地球への警告を決意した。
「プロジェクション装置の使用には、3 人の英雄の支持が必要です」とドメルは言った。「1 人は私が賛成しましょう。しかし、あと 2 名の賛成を集める必要があります」
「しかし、同時代の地球人とガミラス人は我々のみ。いったい他の 2 名の支持をどう取り付ければ良いのか」
その時、知った声が聞こえた。
「残り 2 名のうちの 1 名は私が支持しましょう」
「スターシャさん!」
同時代の地球人とガミラス人で招待されたのは沖田とドメルのみ。しかし、イスカンダル人は別だった。
「スターシャさんまでここに招待されているとは。しかし、いったいな

ぜ……」

「理不尽な暴力に命を持って抵抗したのです」と美しいスターシャはうなずいた。「そこがアクエリアスの女神に英雄として承認されたようです」

「ならばあと１人ですな」とドメルは言った。「地球の命運に興味を持つ誰かが他にもいるはずだ」

「しかし」とスターシャは言った。「そもそも地球を知る者は多くありません」

「そこが悩みどころだな」とドメルも同意した。

そのとき、スターシャをナンパしてくる傲慢な男がいた。

「いい女だな。私の女にしてやっても良いぞ」とその男は言い放った。地球人ではない。どこかの異星人だ。

「お断りします」とスターシャはきっぱり言った。「どこのどなたか存じませんので、お誘いの是非を判断もできません」

「これは失礼。私は暗黒星団帝国のスカルダート。生身で変装して地球人の前に出て演技をした大胆さが評価されて英雄の庭に招待されたようだ」

「地球人ですと!」と沖田が声を上げた。「あなたは地球人には見えませんが、地球人を知っているのですか?」

「知っているとも。我が母星は地球の戦艦に破壊されて敗北したのだ。確かヤマトという名だった」

「ヤマト!」沖田は声を上げた。「無理かも知れないがお願いしたい。私はプロジェクション装置を使いたいのだ。ヤマトを知るあなたに、推薦者になってもらえないだろうか。どうしても、あと１名の推薦者が必要なのだ!」

「その女性が私のものになるのなら」とスカルダートはスターシャを指さした。

「お断りします」とスターシャは即答した。

「やはり無理な相談でしたか」と沖田は落胆した。

「そうでもない」とスカルダートはうなずいた。「別のものを代償に差し

出すということでも良い。たとえば、ヤマトを自沈させるのだ」
「ヤマトを自沈!　そんなことができると思いますか!」
「我が母星はヤマトに破壊されたのだ」
沖田は黙りこんだ。
場が気まずくなった。
そこでドメルが言った。「スカルダート殿。その立場を曲げてなんとか協力して頂けないだろうか。ヤマトに母星を破壊されたのは私も同じなのだ。しかし、沖田艦長は地球だけの問題としてプロジェクション装置を必要としている訳ではないのだ。もし、アクエリアスをワープさせる技術が普遍的に使われると地球のみならず全ての惑星への試練が変調してしまうのだ」
「私からもお願いします」とスターシャも言った。
しばらく考えてからスカルダートは顔を上げた。
「敵は誰かね?」とスカルダートは質問した。
「ディンギルのルガ教徒だ」
「ディンギルか。我が母星を破壊したヤマトがディンギルごときに負けるのは見たくない。では協力してやろう」
「本当か!」
「かつて、地球人をペテンに掛けようとして失敗した。もう1回ペテンに掛けようとは思わない」
かくして、3人の英雄の支持が揃った。
沖田は地球への帰還が可能となった。
「しかし、それでも、私はおまえを自分の女にしたい」とスカルダートはスターシャに手を伸ばした。
「それはお断りします」スターシャはきっぱり言った。「でも、沖田への協力を申し出たあなたとは、少しだけお話をしてもよろしくてよ。あちらでお話をする時間を持つのはいかが?」
「もちろん、喜んで!」とスカルダートはニヤニヤと笑った。

「スターシャさま!」とドメルが声を上げた。
しかし、追いかけようとするドメルを沖田は止めた。
「あの女性は、見かけ以上にしたたかだ。上手くやってくれるだろう」
「しかし」
「それにあのスカルダートという者。傲慢で残忍な男とみたが、茶目っ気もありそうだ」
「茶目っ気……。地球人に変装したという話もしていましたな」
「傲慢さだけで敵に変装などはできまい」
「確かに。自分も地球人に変装するなど考えたこともありません」ドメルは頭をかいた。

沖田は、誰もいない山奥に降り立った。
いきなり街中に出現すると混乱を引き起こしかねないからだ。
そして近くに民家を探して電話を借りた。
電話する相手は佐渡酒蔵だった。
「沖田艦長か!　確かにあんたの死亡を確認して診断書も書いた。なんということだ。酒を飲みすぎたようだ」
「そうではないよ」
「ならば沖田艦長の幽霊が出た」
「足は2本ついておる」
「ならば、酒が見せてくれた幻か。幻でも会えて嬉しいよ、沖田艦長」
「佐渡先生、驚かないで聞いて欲しい。私はアクエリアスの技術で現実世界に投影された影のような存在だ。つまり死人だ。佐渡先生の診察は間違っていない。わしは確かに死んでいる。アクエリアスには死んだ英雄を集めた英雄の庭園という場所があり、わしは招かれた。そして、アクエリアスには死者を投影する装置があるのだ」
「さっきから言っているアクエリアスとは何だね?」

「それが本題だ」
「聞いたこともない名前だ」
「しかし地球の運命と密接に関係する名前でもある」
「まさか。アクエリアス人が攻めてくるのかね?　あまりに短期間に何種類もの異星人に地球は狙われてもう結構という感じじゃ」
「佐渡先生には嬉しい話と哀しい話がある」
「聞こうじゃないか」
「アクエリアス人は攻めてこない。アクエリアス人は宇宙艦隊を持っていないし、そもそも生きているアクエリアス人は１人もいない」
「それはいい話じゃ」
「哀しい話もある。ディンギルという他の星は地球を欲していて、宇宙艦隊を保有しているらしい」
「なんじゃと!」
「そして、アクエリアスを用いて地球を水没させる計画があるという」
「詳しい話を聞こうじゃないか、沖田艦長。佐渡犬猫病院まで来てくれるかね?」
「無論だ。今回、私は表に出たくない。既に死んでいるからな。佐渡先生が代理になってくれると嬉しい」
「しかし、藤堂長官ぐらいには話を打ち明けて良かろう」
「そうだな。話は藤堂までだ」

佐渡犬猫病院で佐渡と再会した沖田は、まず診察を受けた。
その結果、佐渡は間違いなく人に見えるが人ではないと結論した。
次の問題はどうやってアクエリアスの存在を地球人に説明するかだった。
「アクエリアスが本当に何度も地球に回遊してきて試練を与えたのなら、何か記録ぐらいあってもおかしくない。まずはそこから攻めよう」と沖田は言った。

「死んだ沖田さんの話よりはその方が通りそうだ」佐渡はうなずいた。「コンピュータ、調べてくれ」
「了解デス」
佐渡犬猫病院のコンピュータが自動検索を開始した。
「古代は元気にしているか?」沖田は佐渡に質問した。
「ああ、今は立派なヤマト艦長だ。今も航海中のはずだ」
「そうか。ではもう森君と結婚したのかね?」
「それはまだじゃ」
「森君もヤマトに?」
「今は藤堂長官の秘書じゃ。地球におる」
「大した出世だ。あまり出世しすぎると古代も結婚できないかもしれんな」
「なに。ヤマト艦長も立派な立場だ。釣り合うさ」
そのとき、コンピュータが報告した。
「アリマシタ」
「早いな」
「連邦博物館ノ目録ヲ調ベタラスグ見ツカリマシタ」
「何があったんじゃ?」
「バビロニアノ粘土板文書ニ、アクエリアスニ言及シタモノガアリマス。宇宙神話トイウ分類デス」
「神話ではなかった……ということじゃな」
「そういうことだ」と沖田はうなずいた。
その時、ブザーが鳴った。
「地球防衛軍カラ連絡デス」とコンピュータが報告した。「古代艦長ガ、未知ノ惑星ヲ水没サセル謎ノ水惑星ト遭遇シタソウデス。ソノ惑星ハ地球ニ向カイツツアルトイウ情報デス」
「謎の水惑星か。おそらくアクエリアスだ」

「存在は証明されたのう」
「佐渡先生」と沖田は佐渡の顔を見た。「すぐにその粘土板文書を博物館から借り出して、藤堂のところに行ってくれないか。こちらに情報があることを明確に示しておきたい」
「いいじゃろう」
そのまま佐渡は立ち去った。
沖田は犬と猫に囲まれて留守番をすることになった。
「退屈だな、コンピュータ。土方や山南の連絡先を調べてはくれまいか」
「フルネームヲオ願イシマス」
「土方竜と山南修だ」
「ドチラモ戦没シテオリマス」
沖田は微妙な表情になった。
「仕方が無い。墓の場所を調べてくれ。墓参りぐらいはしてやろう」

その夜。
こっそりと沖田は藤堂と面会した。
そこで沖田は包み隠さず藤堂に事情を説明した。
そして、話し合って、あくまで沖田は表に出ず助言に徹することを決めた。やむを得ず沖田の存在を告白する場合には、佐渡の誤診で脳死に至っていなかったから生存していた……と説明することにもなった。
これは佐渡の医師の名誉にも影響することだが、佐渡は快諾してくれた。
これで良いと沖田は思った。
あとは、古代ら若手の頑張りに期待すれば良いと思っていた。
ところが数日で状況は逆転していた。
地球へのディンギルの大空襲が終わってみると、沖田の立場は一変していた。
艦隊決戦の敗北と地球本土への空襲で艦隊のみならず人材も払底してい

たのだ。
　地下ドックで修理中のヤマトは空襲による撃破は免れたものの、多くの犠牲を出した古代は既に辞表を書いていた。
　古代ら若手に任せるという沖田の思惑は実行不可能になっていた。
　さすがに自分からは言えないのだろう。藤堂は、宇宙戦艦ヤマト艦長への復帰依頼を森雪に託してきた。
　沖田は、森雪を相手に足は 2 本ついているという話から始めねばならなかった。

　それからの沖田は、ヤマト艦長に就任したものの白い目で見られる日々だった。
　何しろ、新装備の知識は無いし、艦内組織の知識も無い。新乗組員も知らない。しかし、大英雄なので許される。それどころか、喜んで命を投げ出す僚艦の乗組員達まで出てくる始末だ。
　それらは沖田の本意では無かった。
　もともと艦長職に復帰する予定ではなったのだ。
　そんなものは古代らに任せておけば良い。
　それよりも重要なことは、時間にゆとりを持った状態で地球に警告することだ。時間さえあれば対策が取れる。気付いたときには遅かった……という事態だけは避けねばならない。しかし、周到なディンギルの地球侵攻計画はその時間的なゆとりも奪って行った。アクエリアス最後のワープを阻止できるか、というぎりぎりの状況が発生してしまった。
　沖田は、アクエリアスの海上で、プロジェクション装置を使って空に自分を投影するアクエリアスの姿を見た。
　そのとき、沖田はある 1 つの疑惑を抱いた。
　アクエリアスはこの星に敵はいないと言い切った。
　なのに、その直後にコスモタイガーの山木隊がディンギルの艦隊を発見

した。
　アクエリアスは嘘つきではないはずだ。
　ならば、ディンギルの艦隊は敵ではないことになる。
　では、敵では無いとしたら何か。
　つまり試練だ。
　この話は、一見して、アクエリアス信仰に逆らうルガ信仰を行うディンギルの一派がアクエリアスをワープさせて地球を水没させ、地球を手に入れる計画に見える。しかし、それも試練なのだとしたらどうだろうか。
　沖田は容易に想像ができた。
　アクエリアスの試練は滅ぼすためのものではない。正しい手段を執れば生き延びることができる。だが、試練がそのようなものだと分かってしまえば怖くない。怖くなければ必死に対応もしない。それでは試練にならない。試練である意図を隠蔽するためにルガという神をでっちあげたのではないか。
　なぜそう思えるのか。
　結果として発生する行動が同じだからだ。
　アクエリアスの試練も、ルガの神が求める侵略も、結局はアクエリアスの水で地球を満たすことが求められている。行動として見るなら同じだ。
　ルガとは、アクエリアスの本来の意図を秘匿するためのダミー神に過ぎないとすれば、今起きているこの状況はなんだ。
　アクエリアスが 20 回目のワープを行ったあと、沖田は夜中にこっそりヤマトを抜け出して英雄の庭園に戻った。
　そして、ドメル、スターシャ、スカルダートと相談した。
　「こちらでも面白いことが分かってきたぞ」とドメルが言った。
　「ほう」沖田は身を乗り出した。「どんなことですかな」
　「ディンギルのルガ教徒は女性を連れていない」
　「どういうことですかな?」

「彼らは同族の女子供を全てディンギル星に残してきた。そして、その星は水没して全員が死に絶えた。それは分かっていたはずだ」とドメルは言った。「ところが、ディンギル星を脱出したルガ教徒は、神殿大要塞に一人も女性を乗せていない」

「クローン生殖で仲間を増やすとか、冷凍保存された卵子を持って行ったとか。そのようなことではないのですかな?」

「どちらも違います。クローン技術を彼らは持っていないし、卵子や遺伝情報を持ち出したという話もありません」

「では……」

「ディンギルはたとえ地球侵略に成功しても一代で滅びます」

「滅ぶことが前提のマヌケな侵略をあえて行うとは思えませんな」沖田は感想を言った。

「裏があると見るべきです」とドメルはうなずいた。

「こちらも、スターシャと一緒に歩き回った結果、別の話を聞き込んだぞ」とスカルダートが言った。彼は、地球人の変装をしていた。意外とその肌色の顔が気に入っていたようだ。

「ほう。そこまでスカルダート殿が協力してくれるとは思いませんでした」

「アクエリアスの水の総量の計算が合わないのです」

「は?　どのような意味ですかな?」

「アクエリアスはほぼ全体が水の惑星だが、非常に多くの惑星に生命の種子を含む水を分けてきたのです」とスカルダートは言った。「我が母星も例外では無い。ところが計算してみると、明らかにアクエリアスが元々持っていた水では全ての惑星に水は行き渡らないのです。まして、再度訪問して行う試練で起こる洪水のための水はもっと足りません」

「つまり何ですかな?」

「今アクエリアスに満ちているもの。そして、アクエリアスから各惑星

に降り注ぐものは水ではない。水に似た何かなのだ」
「水に似た何か……」
「いわばアクエリアスの愛液のようなものだ」
スターシャが横を向いた。「そのような下品な言い方は私の望むところではありません」
スターシャは立ち上がってその場を立ち去った。
しかし、立ち去り際に振り返って一言だけ言い残した。「しかし、沖田艦長には有益なヒントになるかもしれません。教えて差し上げなさい」
スターシャは立ち去った。
「あのツンとした感じも私の好みだ」とスカルダートは言った。「しかし、せっかくの配慮だ。教えてやろう」
「頼みます」
「ヤマトを愛液で満たせ。そして、そこで射精をするのだ。といっても、もはや我々には射精能力が無い。英雄の庭園に来た時点でそれは失われた能力なのだ」
「では、まだ生きている誰かに射精を依頼すれば」
「無理だ。生きている人間は、アクエリアスから見ればゴミのように小さい。存在すら気付かれないだろう。あくまで死んだ英雄たるおまえがヤマトの波動砲を射精の代用品として発射しろ」
「しかし波動砲を発射したら相手を破壊してしまう」
「砲口に栓でもしておけ」
「それでは効果が……」
「あくまで象徴的な行為なのだ。効果など無くても構わん」
「逆に、砲口に栓をして波動砲を撃てばヤマトが自沈してしまう」
「その程度の犠牲はやむを得まい」とスカルダートは言った。「船ならまた作れば良い。生きている者達が自分達のための船をな。既に死んだ者は船を必要としない」

沖田は考え込んだ。
ドメルが割りこんだ。「まさか、ヤマトに復讐するために自沈を勧めているのではありませんな」
「復讐ならば、これほどの見せ場をヤマトに与えるわけがない。おそらくヤマトは永遠に語り伝えられる伝説の船になるぞ。もしかしたら永遠に名前が襲名され続けるような伝説の船だ」
「確かに」とドメルはうなずいた。「復讐ならばもっと惨めな最期を求めるはずだ」
しかし、沖田は別のことを考えていた。「結局、何なのだ。なぜ象徴的な射精が必要とされているのだ」
「アクエリアスの過剰な愛の発露としての愛液を中和出来るのは、象徴的な射精のみだ」
「過剰な愛……」
「そうだ。過剰な愛は、過剰な試練として現出する。過剰な試練は相手を殺してしまう。凶悪な愛となるのだ」
「では、ルガの神の正体とは……」
「おそらく、過剰な愛を抱いたアクエリアス本人だろう」
ようやく、全貌が見えてきた。沖田はそう思った。
しかし、プロジェクション装置でヤマトに戻ろうと１人で歩いていると、待っていたスターシャに話しかけられた。
「沖田艦長」とスターシャは澄んだ声で言った。
「私はヤマトに戻ります。ヤマトをこれから自沈させねばなりません」
「その前に１つだけ」
「なんでしょう?」
「現在ヤマトに乗っている古代進と名乗る男。彼はいったい何者ですか?」
「なに……?」沖田は硬直した。「古代が?」
「英雄の庭園に来た沖田艦長と同時代の地球人は沖田艦長だけでした。

しかし、それは沖田艦長が来たときの話です。その後で、英雄の庭園の名簿に古代進の名前が記載されました。間違いなく彼は死んでいます。生きている者の名前が名簿に乗ることはありません。しかし、いくら探しても古代進はこの庭園にいません。なぜでしょう。そして、古代進を名乗る人間が今ヤマトに乗っています。彼は何者なのですか?」

「わしには古代進本人にしか見えなんだ。他の誰も古代の正体などという疑問を口にはしていない」

「では、なぜ名簿に古代進の名前があるのでしょう」

「分かった、古代が思いもよらない爆弾を抱えて艦長室を訪れる時を覚悟せよということだな」

「古代進が最後の１人だと思わないように」とスターシャは言った。「私の印象が確かなら、もう１人爆弾を抱えた誰かが来ます」

「もう１人!」

「それが何者であり、どのような爆弾を抱えているかは分かりません。しかし、十分に注意なさい。おそらくその人物は古代進と同じくあなたの味方の顔をして出現します」

「ご忠告に感謝します」

沖田はヤマトに戻った。

艦長室の椅子に座ってホッとするとドアをノックする者があった。

古代だった。

古代は驚愕することを申し出た。アクエリアスのプラントから重水を積み込みたいと言いだしたのだ。それは沖田の意図した行動と同じだった。もちろん、重水など積み込んで炸裂させても、波動砲のエネルギーとは比較にならないほど小さい。物理的にはあまり意味が無い。意味があるとすれば、象徴だ。スカルダートが言ったように、あの水には象徴的な意味がある。

しかし、古代はその象徴的な意味を理解して言っているのだろうか。

「目的はなんだね?」と沖田は質問した。
「結果が証明する……ということではいけませんか?」
沖田はピンと来た。古代は何かを知っている。しかし、沖田は何も知らないと思っている。沖田は脳死に至っていなかったという佐渡先生の説明を鵜呑みにしているのだ。象徴的な意味など説明しても許可が下りないから、遠回しに許可を求めてきているのだ。
ならば沖田から言うことは１つだった。
「古代、平気でおまえはこのヤマトを爆破させられるのか?」
その瞬間、古代の表情が変わった。
「艦長。自分と同じ考えを……」
「うむ」と沖田はうなずいた。「ただ、乗組員の動揺を抑え、一糸乱れず行動するにはどうしたらいいか。考えあぐねていた」
「私もこの手でヤマトを爆破するなんて、とても……。しかし、それだけが地球を救う方法なら」
古代は肩をふるわせた。「艦長……」
「ははは」委細は分からないが沖田は嬉しくなった。ヤマトを爆破する困惑を少なくとも沖田と古代は共有している。なぜ古代がその情報を知ったのかは分からない。しかし、気持ちは通じ合っていた。
「大きくなったな、古代。おまえのおかげで私も決心が付いたよ」
つまり、スカルダートのアドバイス通りに、ヤマトを自沈させるということだ。
沖田は自分が波動砲の引き金を引くと主張する古代を言いくるめ、自分が引くと結論した。
古代は納得して引き下がった。
しかし、沖田は大きな疑惑を抱えた。
古代は雪という女性がありながら自ら死ぬような行為を進言してきた。明らかにおかしい。

沖田は古代が去ったあとでもう一度報告書を見た。

ヤマトはハイパー放射ミサイルの直撃で、ヘルメットをかぶっていない乗員を失った。かぶっていれば仮死状態で済んだ。しかし、古代はヘルメットをかぶっていなかった。それなのに奇跡的に生き延びた。沖田はようやく理解した。この報告書はおかしい。この記述が確かなら古代はこのときに死んでいる筈なのだ。そして、このときに英雄の庭園に招かれて名簿に載ったとすれば時系列的な辻褄が合う。

では、さっき沖田に自沈を進言しに来た古代は何者なのか?

少なくとも敵には見えない。

しかし、間違いなく英雄の庭園に来たことはない。

沖田は佐渡先生を呼んだ。

「何か用かな」酒瓶を持った佐渡が艦長室に来た。「あんたに診察は不要のはずだが」

「佐渡先生。わしは今でこそ英雄と呼ばれているが元は物理学者だ。学者は奇跡などそうそう起こらないことを知っている」

「何が仰りたいのですかな?」

「佐渡先生。先生には医者としての守秘義務がある。そうですな?」

「ああ」

「それで、私の正体も口外されていない」

「その通りじゃ。そこは硬く口を閉ざしておるよ」

「では、他に口を閉ざしていることは何ですか?」

そこで佐渡は黙りこんだ。

「言えませんかな?」

「言えません。それが医者の義務ですから」

「さっき、ここを訪れた古代進という男。あれは何者ですかな?」

「沖田艦長。あんたは気付いてしまったんだな。息子も同然の古代進のことに」

「佐渡先生。先生は知っているのですな?」

「ほとんど知られているようなので、お話ししましょう。あれは本物の古代ではないと」

「やはり。しかし、本物の古代に見える」

「そうでしょう。あれは本物の古代と同じ遺伝子を持ち、同じ姿を持ち、同じ心を持ち、同じ記憶を持った存在じゃ」

「クローン培養した別の身体に記憶を移し替えたと?」

「その通り」佐渡はうなずいて酒を飲んだ。

「しかし、死んでしまえば徐々に脳内の記憶は崩壊していく。量子スキャナでは記憶を読み取れなくなるはずだ」

「おそらく沖田艦長に分からなかったのはそこじゃろう」

「そこにトリックの種があるのかね?」

「そうじゃ。第2次黒色戦役で古代守が死んでしまった教訓で、人材をできるだけ失わないように選ばれた数名の人材の予備の身体をクローン培養する研究が進んでおった。古代進もそのうちに1人で、極秘のうちに古代進ツヴァイというクローン体が作られていた。そのことは、実はわしと真田君は知っておった。真田君は、あんたが現役の時代は手足だけが機械じゃったが、今や身体の9割が機械化されたサイボーグじゃ。ハイパー放射ミサイルの放射線があっても、かろうじて動くことができた。そこで、死にかけていた古代の脳内の情報だけは遠隔スキャンしたのだ。古代本人はハイパー放射ミサイルの放射線で死んでしまったが、脳内データは残った。これを、古代進ツヴァイの脳に転写すれば古代は復活できる。これは本人も薄々は知っていることじゃ」

「では報告書にあった、森雪の自殺を真田が止めたという話は……」

「そうじゃ、古代進は確かに死んでいたので森雪は自殺を試みたが、復活の可能性を知っていた真田が止めたのじゃ。彼だけはかろうじて身体が動いたのじゃ」

「話としてはよくわかったが、もっと重要なことが 2 つ残っている」
「それじゃなんじゃね?」
「1 つめ。なぜ古代は雪という大切な女性がいるのに、自分を殺すような波動砲発射を進言したのか」
「古代進ドライが用意されているからじゃよ。死ぬ前に意識をスキャンしてもう 1 つの身体に移し替えれば良いのじゃ」
「ならば、なぜわしに発射の権利を譲ったのだ」
「想像は付く。古代はあんたことのこと、沖田十三ツヴァイだと思ったのだろう。だから当然沖田十三ドライも用意されていると思って、本当に死ぬわけでは無いと思っているのだろう」
「しかし、沖田十三ドライなど用意されてはおらん」
「その通りだがそれは最後まで伏せておけよ。古代はそう思うからあんたに権利を譲ったのだ」
「了解した」
「残ったもう 1 つは何だね?」
「古代は、どこでアクエリアスの水を積み込むというアイデアを得たのだろうか。彼は英雄の庭園に来ていない。死んで英雄の庭園に招かれたが、英雄の庭園に行く前に新しい身体で蘇生してしまったのだ」
「英雄の庭園……、古代はその話とは関係無いはずじゃ。あんたの復活はアクエリアスの技術じゃが、古代の復活はあくまで地球の技術で行われたものじゃ」
「では佐渡先生にも分からないわけですな」
「面目ない。わしに理解できるのは、地球の医療技術だけじゃ」
佐渡は立ち去った。
沖田は艦長室から眼下を見下ろした。
アクエリアスの水を積み込み中だった。
プラントはディンギル製だった。その施設を今は地球側が利用している。

古代が会ったというルガール大神官大総統は、ルガの神からそのアイデアを得たという。しかし、古代は全く同じ発想で、同じプラントから同じ液体を汲み上げている。

ならば、古代もルガの神と何かの関係を持っているのではないだろうか。もしそうなら、アクエリアスの神の庇護下にある沖田らと隔絶した世界にいることになる。

もちろん、ルガールと古代は裏で結託して陰謀を巡らせているようには見えない。しかし、ルガールも古代もルガの神の差し金で戦いを強要されているのではないだろうか。

そこで、沖田は重大な話を思い出した。

古代は神殿でルガールに会ったとき、即座に射殺せずに和解を申し入れた。その結果として、アクエリアス 20 回目のワープを許して地球はピンチに陥っている。なぜ古代は地球の数億の命を危険に晒してまで、ルガールとの和解に固執したのだろう。もしや、古代はルガールと特別な関係にあるのではないだろうか。同じルガの神の影響下にある兄弟信者のような……。

沖田は頭を振った。

少なくとも古代はルガの神を信じていない。そういう男ではない。

ならばこの最後に残った違和感は何なのだ?

やはり、スターシャが言ったようにあと 1 人誰かが来て、彼の到来でやっと真相が分かるのだろうか?

最後の 1 人の登場まで、それほど待たされることはなかった。

アクエリアスの水を満載したヤマトがディンギル残存艦隊に包囲されたとき、彼は来た。颯爽と登場して、ディンギル残存艦隊を蹴散らしてくれた。

デスラーだった。

沖田は驚いた。

スターシャの直感が的中したこと。そして、その相手がよりによってデスラーであることに。

しかし、沖田の目は節穴ではなかった。

その戦いは何かがおかしかった。

ディンギル艦はヤマトを完全に包囲していたのに、デスラーの襲撃で一隻も撃たずに撃沈された。それはあり得ない結果だった。一瞬で全てのディンギル艦を撃破できるわけが無いし、たとえビームが命中しても砲の 1 発 2 発を撃つ時間が残るかも知れない。しかし、そのような壊滅寸前の砲撃は 1 発もヤマトに届かなかった。水を満載して鈍重なヤマトは回避できなかったと思われるのに攻撃は来なかった。

即座に沖田は、この救援が見せかけのインチキであることを察知した。つまり、本当の意味でデスラーはヤマトを助けに来たわけではない。おそらく、ディンギルという既に余計になった存在に終止符を打つために来たのだ。

つまり、こういうことだ。

アクエリアスまたはルガの神は、ヤマトが行う予定の象徴的な射精を待ち望んでいる。

ヤマト撃破に執念を燃やすルガールとディンギル艦隊はもはやアクエリアスまたはルガの神の役には立っていない。だから、デスラーの砲撃は終わりの合図に過ぎない。ディンギル人はそれを見て攻撃を取りやめることしかできない。ルガールの旗艦に向けて発射されたデスラー砲は、もう任務は終わったというルガの神からの召喚状に過ぎないのだろう。

「わしは 10 分ほど艦長室に戻って準備する。後のことは古代に任せる」

沖田は艦長室に移動した。

そして英雄の庭園に戻ると、スカルダートとガミラス将棋を打っていたドメルを捕まえると質問した。

「この庭園にいるガミラス人は君だけ。それは間違いなく事実かね?」

「ここに来たときにそう聞きました」
「ならば、後からデスラーがここに来たという可能性はないかね?」
「待って下さい」とドメルは慌てて管理事務所に走った。「自分は一度も総統閣下を見ていませんが、見ていないことは来ていないこととイコールではありません」
ドメルは名簿をめくった。
「ありました。最近、英雄の庭園に招かれています」
「やはり……。古代と同じだ」
「探してみましょう」と歩き出そうとするドメルを沖田は止めた。
「おそらく無駄だ」
「なぜです?」
「おそらくデスラーは死んでいるが、意識をスキャンして辺境のクローン体に意識を移し替えて復活しているはずだ。その際、ヤマトを助けろというルガの神の声を聞いたはずだ」
「なんですと?」
「ヤマトを助けに来たデスラーの艦隊は旧式艦ばかりだった。おそらく、辺境でモスボールされていた旧式艦を引き連れて駆けつけたに違いない」
「では総統閣下は……」
「死にながら生きているのだ。だから我々と同じ神の領域にいながら、まだ生きている身体を持って生きている」
ドメルはうなだれた。
「おそらく古代もその方法でルガの神の声を聞いたはずだ」と沖田は自分で自分に納得した。
「面白い」とスカルダートが後から言った。「生きながら死んでいる古代とデスラーか。アクエリアスの神の力が出し抜かれている。システムが状況に追従できなくなってきている。我が母星も、それに近いところまで肉薄していた。しかし、その直前で滅んだ。ヤマトに滅ぼされてな」

「スカルダート殿……」
「だが、滅ぼされて良かったのかもしれぬ。宇宙の神なき時代、神が死んだ時代、神話が死んだ時代を見なくて済んだのだからな」
「神は死ぬと?」
「射精されて女が口走る言葉は多くない。死ぬとはそのうちの 1 つに過ぎぬ」
「では……」
「化けて出ぬように間違いなく神を殺せ。おまえのヤマトの象徴的な射精でな」
「だが、おそらく神を殺すとこの場も消える」
その時スターシャが沖田の後から出てきた。「状況は既に把握しています。アクエリアスの中心部で起こっている重水による核融合が、この場を維持するエネルギー源です。しかし、それは枯渇しつつあります。既に臨界量を維持できなくなりつつあります。いずれにしても、この場は消えて、私たちの存在も消えるのです」
「神を殺せ」とスカルダートは言った。「そして沖田よ、神殺しの英雄となれ。最後にして最大の英雄だ」
「スカルダート殿は最後の英雄になる野望はお持ちではないのですか?」
「私は」とスターシャを見た。「彼女の最大の英雄になれたことで満足だ」
「誤解無きように申し上げますが」とスターシャは言った。「私の最大の英雄は古代守。2 番目はデスラー。あなたは 3 番目に過ぎませんよ。よく頑張ったのは認めますが」
せっかく格好良く締めようとしたスカルダートは神妙な表情になった。
ドメルが大笑いした。

古代と雪を送り出すと、既に沖田がやるべきことは多くなかった。
雪にはこっそりと指示を出しておいた。アナライザーが救助した少年に

スカートをはかせてスカートめくりしていると聞くので、一件が落着したら森雪にはスカートをはくようにと言ってある。男の子にスカート女装をさせるなど、あまり好ましいことではない。

沖田は艦長席に座って、レバーを撫でた。

「長い間ご苦労だったな、ヤマト。おまえを坊ヶ崎の海底に連れて帰してやりたいがそうもいかんようだ。許してくれよ」

このままヤマトはアクエリアスの水柱を前に自沈する。ヤマトはヤマトで死んだ英霊達のところに行く。いや、それだけではない。沖田自身が戻る英雄の庭園も残らないはずだ。沖田の行き先も同じだ。

沖田はここで何に対して祈るか考えた。

アクエリアスもルガも祈る対象では既に無い。

ならば何に対して祈ろうか。

沖田は地球に決めた。地球はこのあとも古代達が生きるための大地として残り続けるだろう。

沖田は前方を見つめた。

アクエリアス周囲に渦巻く水分から生じる雲が割れてアクエリアスが見えてきた。

「地球よ。あの子達のことを頼みます。ヤマトよ、これまで地球のために戦って死んでいった戦士達のところに行こう」

そして、沖田は波動砲の発射トリガを掴んだ。

エピローグ

デスラーは、地球から離れつつある自分の旗艦からアクエリアスを見た。

ヤマトの自沈による洪水の阻止を経て、アクエリアスは地球の周回軌道に移行していた。そしてアクエリアスは熱を失って氷結しつつあった。中心部の核融合が停止しつつあったからだ。

ヤマトの自沈は肉眼で確認した。アクエリアスの大気圏内にまで入り、

生身でデスラー艦の外にでて一部始終を見届けたのだ。大気圏内なので風まで吹いていて、マントが煽られた。そして、見届けたのは宿敵であり味方であった宇宙戦艦ヤマトの最期だった。

その光景はブリッジで何度思い返しても感慨深いものがあった。

デスラーの後には、ガルマン人の愛人と愛人に生ませた息子達が立っていた。

国境への視察中などと言ったが、本当はそうではない。国境地帯の別荘に愛人と子を住まわせ、デスラーの予備の身体を保管させたのだ。有事の際は、デスラーの脳内の情報だけが転送され、そこで目覚める。

国境地帯に残された装備は旧式艦ばかりであったが、デスラーにとってそのことはあまり重要ではなかった。ボラー連邦からガルマン民族を解放したときは、もっと少ない装備で始めたのだ。

しかし、不思議なのはそれ以来夢で聞こえる謎の声だった。

その声の導きが無かったら、これほどタイミング良くヤマトの救援になど来られなかった。

通話して挨拶を交わした古代も似たようなことを言っていた。名前も知らない誰かの声を時々夢で聞くのだという。デスラーと同じだった。

そして今なら分かる。ディンギルのルガールも夢でルガの神のお告げを聞いていたというが、実際に聞いていたのは同じ謎の声なのだろう。

それにしても、ヤマト救援に間に合ったのは家族の助けがあればこそだ。

家族を大切にすれば良いこともある。

そして、古代の顔を思い出した。

おそらく、古代もあの森雪とか言う女を伴侶として家族を作り、子をなしていくだろう。それで良い。戦争など、子育てが終わって人生に退屈した時に再開すれば良いのだ。

そしてデスラーは愛人を振り返った。

「デスラー砲は発射されたが、私の生身のデスラー砲は発射態勢のまま

だ。あとで部屋に来てくれるな」

「もちろんです。デスラー様も、そのまま生身のデスラー砲を放って静かにベッドの中で自沈してくださいませ。朝まで添い寝をさせて頂きます」

その時、デスラーにはアクエリアスが女神そのものに見えた。

過剰な愛を望む女神が、愛を満たされてやっと落ち着きを取り戻しつつあるように見えた。

生きているのか死んでいるのか曖昧なオキタこそが、生きているのか死んでいるのか曖昧なクイーン・オブ・アクエリアスの過剰な愛を満たし得たのだろう。

もちろん、デスラーもオキタに負ける気は無かった。宇宙１の英雄になるのは沖田ではなくデスラーだ。

だが、今はまだ愛人を満たすことが人生の急務だった。

宇宙の良心たるヤマトを救った今、残されたデスラーの急務は家族を愛で満たすことだけだった。

終わり

執筆の方針

- 本小説は、1983 年の映画宇宙戦艦ヤマト完結編は本来なら面白いはずである、と言う前提に立ち、不足する要素を補完する思考実験を目的とする
- 宇宙戦艦ヤマト完結編には複数のバージョンが存在するが 70mm 版を前提とする
- そのような前提なので、映画中で十分に描写された要素は詳細に繰り返さない。たとえばヤマトの沈没シーンは小説中に描かない
- 映画中の全ての台詞を忠実に繰り返すような構成は取らない。理由は手間の割に面白くないからである。読者は、既に映画で聞いた台詞を小説中でもう 1 回読みたいとも思えない
- ただし、小説単体として読める内容を目指す。本小説のみを読んでも、物語が始まって終わる内容を目指す
- そのような方針なので、映像として描かれた要素は基本的に全て肯定する。たとえば、女子供は全て切り捨てて地球に移住しようとするルガールの行為は明らかに子孫を残せずおかしいが、それは描写として肯定する
- 新登場人物は基本的に付け加えない (ザールの副官のナムルのみ、新登場人物と言えないこともないが、当然そこにいたはずの人物として設定されていて、突出した独自性は与えていない)
- 映像において名前が与えられていない登場人物に名前を与える行為は最小限とする。ディンギル星人に名前を与える場合はシュメール文明関連の情報から適宜名前を得る (ナムルとアルリムがこれに該当する)
- ウルクの神殿に存在する神像の神の名は不詳であったので、ルガという名称を仮定して使用した。ルガとした根拠は、ルガールの名前に神の名が含まれているという想定による

- ルガール・ド・ザールの名前はザールという呼称に基本的に統一した。フルネームを書くとルガール大神官大総統と紛らわしいからである
- 追加の設定、設定の変更、解釈の変更は最小限度とする。ハイパー放射ミサイルは確率の雲として接近するので迎撃できないという設定は、単に高速接近するだけなら防御できる矛盾を解消するための設定変更の試みである
- 沖田十三は死んでいて、佐渡酒蔵は誤診などしない名医であるという前提を置く。その結果として、脳死に至っていなかった、誤診であるという解釈は、本来の正しい情報を秘匿するための偽情報という解釈で一貫している
- 古代進は死んでいて、森雪は早まった自殺など試みていないという前提を取る
- ハイパー放射ミサイルの放射線を浴びた真田が動けることに理由を付ける
- 英雄の庭園という設定は、完全に本作のオリジナル設定であるが、既に死んでいる沖田十三が二本の足を持ってヤマトに戻ってくる描写を説明するために追加したものである
- 英雄の庭園において、ドメル、スターシャ、スカルダートを登場させ、他の誰かを英雄として登場させていないことには、ストーリー進行の都合以外に理由はない
- デスラーの救援が三代目デスラー艦ではなく、二代目デスラー艦で行われた理由を説明するために、この艦がディンギルとの交戦で失われた旨の説明を含める
- 二代目デスラー艦と三代目デスラー艦の中間に G.スターシアがあると仮定し、それが残存していると仮定する。G.スターシアの設定画は宇宙戦艦ヤマト大クロニクルに掲載されている。二代目デスラー艦で駆けつける描写を正当化するために、これも失われているとする。ち

なみに G.スターシアが G.スターシャではないのは大クロニクルの記述に従ったもので、誤記ではない

- 佐渡先生が藤堂のところにバビロニアの粘土板を持ってくる描写に理由を付ける
- ディンギルが水没する前にアクエリアスをワープさせていないことに理由を付ける
- ディンギルが水没後に爆発したことに理由を付ける
- ウルクに女がいないことに理由を付ける
- ルガールが息子を殺す心情についての描写は強化する
- 沖田の艦長復活に関しては、良い側面と悪い側面をはっきりさせる
- 物語の一貫性という意味では、同じモチーフに回帰して終わらねばならない。本小説では、プロローグとエピローグは同じモチーフのリフレインでなければならない。そのため、完結編本編に存在しないシーンを積極的に肯定する　(実際には宇宙船からアクエリアスを見る宇宙人の家族、というモチーフで一貫させた)
- 登場人物の視点が飛ぶような内容は読みにくいので可能な限り回避する。とはいえ、ザールは途中で退場してしまうので、ザール視点で最後まで物語を追いかけることはできない。1 章ごとに視点を変更することを許容するが、逆にいえば 1 つの章内で視点は変更しない
- 視点はそれぞれの章ごとにザール、ルガール、古代、沖田とする。根拠は、完結編の物語はザールで始まり、古代対ルガールを経て沖田で終わると分析したからである
- 宇宙戦艦ヤマト天界譚との関連性は一切持たせない。設定も一切共通していない
- 最後に、沖田が森雪に対してスカートをはけという指示を沖田が出している理由は、完結編の最後でみんなアクエリアスの海に走る時、森雪だけスカートの私服である不自然さに理由付けを行うためである。

- その際、ディンギルの少年にスカートをはかせないという理由付けをしている理由は、この少年は女の子のように可愛く、という指示でキャラクターデザインされているという情報による。
- ヤマトが沈んだとき、デスラーが宇宙服も無く宇宙に立ってマントをたなびかせる描写に説明を付ける

以上

完結編分析

登場人物の対応関係

	地球側	宇宙側
生きているか死んでいるか分からない人	沖田	クイーン・オブ・アクエリアス
主役	古代	ルガール大総統大神官
途中で退場する人	島	ルガール・ド・ザール
子供	島次郎	ディンギルの少年
思い人	森雪	ディンギルの少年の母
巨大兵器	ヤマト	ウルク
個人兵器	コスモゼロ	ロボットホース

可能性としてあり得るストーリー展開

- ディンギルの少年のみならず母も救出する。母はロボットホースでルガールの後に乗り込む （二人のコスモゼロに対応する敵側の展開）
- ディンギルの少年に対応する地球側展開として、移民船に乗っていた島次郎が敵の捕虜になり、ルガールに気に入られてディンギルの実体を見る
- コスモゼロの古代と、ロボットホースのルガールの一騎打ち
- 島が死亡するタイミングと、ザールが死ぬタイミングをより接近させる

主要な矛盾点

- アクエリアスをワープさせる能力がありながらディンギルは水没してしまう
- 死んだはずの沖田が生存している
- デスラー艦が旧型
- ディンギルの爆発を予測できていない

- 水は引かないはずであるが、引く前提になっている
- 水爆などよりずっと強力な波動砲を持ちながらヤマトを重水で水爆化することにこだわる
- 通常の手段では防げないハイパー放射ミサイルが、有人艦を盾にすると防げてしまう
- 波動エネルギーをリークする程度で敵の防御を突破できる
- 偵察にわざわざ負傷した古代を出す
- クイーン・オブ・アクエリアスはこの星に敵はいませんと言っているのに、その直後に山木隊が敵を発見してしまう
- クイーン・オブ・アクエリアスが何者か一切の説明がない
- ディンギルは移住に際して女を連れて行かない
- アクエリアスに助けられたディンギルの神殿に祭られているのは他の神
- 冒頭の異次元から来た銀河がメインのストーリーと何の関係も持たない
- 冒頭で撃破されたヤマトのスイッチが入って自動帰投する理由が無い
- ザールが不明の戦艦としてヤマトを襲撃する根拠が不明瞭
- 有人艦が盾になる行為、それを地球人の美徳と説明する行為の根拠が不明瞭
- 沖田が残って波動砲を発射する根拠が不明瞭
- 最後にみんなで走る海岸はアクエリアスの海岸だが、分かりにくく不明瞭
- アクエリアスの浮遊大陸から水がしたに流れ落ちているが、浮遊大陸に水を供給する経路が存在しない
- ディンギルがアクエリアスで汲み上げているのは反波動粒子体、重水、トリチウムという 3 つの説明があり、一貫していない。(トリチウムは重水の構成要素になっている場合もあるが、重水の別名というわけで

はない)

- 全員が倒れているとき、真田だけ動くことができ、森雪の自殺を止められる根拠が不明瞭

総論

ルガールと古代について

- ルガールとは生き方を間違えた未来の古代である
- 古代が持つ属性は「子供を作る者」であるが、ルガールが持つ属性は「子供を殺す者」である。両者は対比される
- 従って両者は対比されるキャラクターでありながら年齢が乖離する。古代はこれから子供を作る者だが、ルガールは既に子供を作った者だからである

愛について

- 沖田は、古代に対して子供を作ることを強く進言するが、ヤマトは天国に連れて行き残さない。つまり、戦いは望むな、愛を望めという結論で一貫する
- 本作の主テーマは戦いではなく愛である。宇宙戦争よりも個人の戦いである。実際に宇宙戦艦の戦闘描写よりも、個人の戦闘描写(たとえばロボットホースに騎乗するルガール)の方に力が入っている
- 本作を見たあとで観客が取るべき行動は格好良い戦闘兵器の模型を作ることではなく、恋人とラブホテルに行き子作りすることである。つまり、強力なリア充の勧めである

卒業について

- この映画でファン層はアニメを卒業させようという意図があるのかもしれない
- あと一歩踏み込むと現実に到達する構成である。子作りは現実に実行可能であるし、ヤマトの行動は現実の戦艦大和の菊水作戦の行動

になぞらえられている。パルスレーザーを高角砲と呼び変えるのも現実に肉薄する行為である

- つまり「アニメじゃない現実なのさ♪」なのである

抵抗勢力について

- ところが、このコンセプトに逆行する圧力が存在する。大人への階段を上ることを拒絶する層が存在し、これまで通りのビジネスを行いたい層が存在する。彼らはアニメファンからの卒業に対して抵抗する。従って、作品の方針は不徹底に終わっている
- 本作品最大の問題は「卒業させて終わりにしたい」「終わりにさせてなるものか」という 2 つの考え方が激突して、いずれの方針も不徹底になったことであろうと推測できる
- このような問題が作品のバランスの悪さをもたらしているものと推測できる。たとえば、クイーン・オブ・アクエリアスがあまりに説明不足になったり、ディンギルの少年に名前すら無かったりするのに、戦闘シーンだけ無意味に長いのは、本来あるべきバランスではないと考えられる
- また、本作品の上映時間が長すぎること(70mm 版で 163 分)も、このような遠因が想定できる

消極的抵抗勢力について

- 過去のヤマトと同じようなものとしてヤマトを認識し、同じように扱おうとする人達がいたと考えられる。彼らは積極的に完結編を否定したわけでは無いが、無意識的に完結編否定を行っていたものと考えられる。

割愛について

- 最後の古代と雪のセックスシーンが 70mm 版で割愛されているが、セックスシーンの存在意義が**それを見ながらマスをかけ**ではないにも関わらず、そのように使用されるケースが多い以上、割愛は妥当

である。映像特典として収録することも本来の表現意図からは逸脱していると考えられる。しかし、逆行圧力の都合により積極的に収録は肯定される

本来の意図

- 35mm 版よりも、70mm 版の方がより本来意図されたヤマト完結編に近いと思われるが、映像ソフトに映像特典としてセックスシーンが付いてきてはそれも不徹底となる

以上

遠野秋彦作品宣伝 2013/12/14 版

リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2

フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか!　アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編!　これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し！【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか!　そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998 年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊!

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版(Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ 2 つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラークはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つけるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの愛人として囲われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4

普通の女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んで

その破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編！　これを読まずにラト姫物語は終わらない。

（しかし、これ単体で読んでも面白いよ!）

魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？　だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説！

君は腕力では無く知力を試される！

ファンタジー勇者伝説

http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W

君は知っているか！　勇者の伝説を！　このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を！

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒

したものではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。
　勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!
　ジーナは叫ぶ。
　一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!
　彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF 版】
http://www.dlsite.com/maniax/work/=/product_id/RJ039225.html
イーネマス! 【立ち読み版(全 16 章のうち第 5 章まで。無料) PDF 版】
http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000
　若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。
　そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。
　そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。
　二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。
　同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快

楽に浸る淫らなTS美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり